

拠点形成概要及び採択理由

機 関 名	山形大学		
拠点のプログラム名称	分子疫学の国際教育研究ネットワークの構築		
中核となる専攻等名	医学系研究科医学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー)	嘉山 孝正 教授	外22名
[拠点形成の目的]			
<p>分子疫学は、従来の臨床疫学研究に「ヒトゲノム計画」の成果を取り入れた新しい学問分野であり、病気の原因・病態・多様性に関与する分子を遺伝子レベル・蛋白質レベルで明らかにし、これらの成果を活用して「オーダーメイド医療」や「ゲノム創薬」の確立に貢献する学問である。したがって、この学問の出発点には深い臨床的洞察が必須であり、さらに臨床統計学、遺伝統計学、遺伝子解析技術、バイオインフォマティクス、生化学、分子生物学、細胞生物学、生理学、病理学など、多種多様な学問分野とチームを組んで取り組むことが不可欠である。本拠点ではこの分子疫学の教育と研究を行う。対象とする疾患は、21世紀COEプログラムで取り組んだ糖尿病、循環器疾患、呼吸器疾患、C型肝炎、パーキンソン病に加えて、がん基本法が成立し、向後、研究面でも重要な対象となる悪性腫瘍の分子疫学研究にも取り組み、世界でのこれら疾患の分子疫学の中心となる拠点形成する。</p> <p>また、人材育成に関しては、常に最先端のテーマに機動的に対応し、上述の研究を推進する人材育成するために「先端分子疫学研究所」を新設する。本研究所の組織運営は、従来の大学任免制度に捕われない抜本的任免制度により行なう。本研究所は、国際水準の先端研究施設であるのはもちろんのこと、医学系研究科大学院における先端医学研究教育の中核となり、山形大学医学系研究科大学院全体の機構改革の起爆剤となる。さらに、この先端分子疫学研究所は、大学院を修了した優秀な研究者を積極的に採用し、先端研究が可能な研究者となるべく育成する。</p>			
[拠点形成計画の概要]			
<p>本研究教育拠点の、具体的な達成目標は以下である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本人を対象とした統合的分子疫学教育研究拠点の構築。 ●日本 - 米国 - 欧州間の検証システムの構築。 ●ゲノム創薬のシーズの発信拠点の形成。 ●国際感覚を身に着けた研究者の養成拠点。 ●自ずから進化する研究者育成のための大学院改革。 ●優秀なポスドクのキャリアアップの場の確保。 <p>これらの目標を達成するため、既存の組織からは独立した前述した先端分子疫学研究所を創設する。優秀な研究者（教員）をリクルートするため抜本的な任用制度の改革を行う。研究業績では第三者的評価を外部の専門家から成るScientific Advisory Committee(SAC)により行う。</p> <p>先端分子疫学研究所の立ち上げには、直ちに研究開発が実行できるように、21世紀COEにより構築された既存のものに立脚して行い、漸次独自性を持った研究に移行する。先端分子疫学研究所の5年間の活動において、日本-米国-欧州に跨がる分子疫学教育研究ネットワークとゲノム創薬のシーズ発信拠点として自立的財源確保が可能な研究拠点を育成する。</p> <p>先端分子疫学研究所で得られた成果は、一例として、オーダーメイド医療の実現と科学的根拠に基づいた健康教育の実現をめざし、山形大学医学部教授が取締役となり、県内の地方自治体が株式を所有、監査役として事業に参加する株式会社COMEセンター（平成15年7月に設立）を活用する等の方策により、研究成果の企業への移転を迅速かつ効率的に行う。COMEセンターでは、既に21世紀COEにおいて、地域住民の健康診断から得られる情報を元に、臨床データ/遺伝子データを備えたデータベースの作製、管理を行ない、糖尿病・パーキンソン病・C型肝炎・慢性閉塞性肺疾患の遺伝子多型を発見し国内および国際特許に申請している。本プログラムを用いれば更なる国際レベルの特許申請ができる。</p> <p>若手研究者の育成・大学院生の教育に関しては、一昨年から進行中の大学院教育改革を、先端分子疫学研究所の開設を起爆剤として改革できる。</p>			

機 関 名	山形大学
拠点のプログラム名称	分子疫学の国際教育研究ネットワークの構築
<p>[採択理由]</p> <p>21世紀COEプログラムの成果である地域特性を活かした分子疫学を基盤とした教育研究拠点形成は我が国のゲノム研究を育成する上で貴重であり、また、大学を挙げての支援体制やCOMEセンターを中心とした企業及び地方自治体との連携体制を構築しており、計画の実現性が期待できる。</p> <p>人材育成面においては、先端分子疫学研究所の任免制度など大学を挙げての教育機構改革に斬新性と努力が認められる。</p> <p>研究活動面においては、地域特性を生かしたコホート研究が行われており、評価できるが、疫学的研究に時間がかかることを考慮しつつも、国際的に可視的な業績を更に発信していく必要がある。</p>	